

第15回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール

優 秀 賞

実践報告部門

**人生100年時代をどのように生きるのか、
主体的なキャリアデザインの描き方**

～「LIFE SHIFT」を題材とした金融経済教育の実践～

東京都・東京都立国際高等学校 教諭 小松 純

知るぽると
www.shiruporuto.jp

© 金融広報中央委員会 2018

1. はじめに

本実践は、東京都立国際高等学校の国際理解科目「国際関係」の受講者（3年A・C・E組99名）を対象にした授業実践である。本校は、海外帰国生徒や外国人生徒が全体の約3割を占め、出身国も40か国以上になる。国際経験が豊かな反面、日本語での読み書きを不得手とする生徒や、日本の小学校・中学校における一般的な既習事項を学習していない生徒も存在する。NIE（Newspaper in Education）実践校である本校は、生徒に対して、正しい日本語を身につける一環として、年間を通じて新聞を活用した取り組みを実施しており、新聞を読む習慣を身につけるように指導している。

2. 実践に当たって

（1）テーマの設定

「人生100年時代」を題材に取り扱った書籍やCMを見る機会が最近増加している。その要因の一つに、リンダ・グラットン氏とアンドリュー・スコット氏が著して、世界中で話題となっている「LIFE SHIFT」が影響していることが挙げられる。「平成29年版高齢社会白書」（内閣府）においても、日本人の平均寿命は今後も伸長すると予想され、超高齢化社会は間もなく訪れる。

日本では、欧米とは異なり終身雇用制や年功序列型賃金制など、日本型雇用慣行と呼ばれる独特なシステムや制度が存在する。超高齢化社会が進む日本においては、年金受給額の減額や終身雇用の見直しが避けられず、従来のライフサイクルを再考しなければならない時代となる。生徒には、これからの人生をどのように設計していくのか、金融経済教育の観点とキャリア教育の観点を融合させた、本実践を主題として設定した。

（2）指導に当たって

本実践は、各必修クラスを対象に45分の授業を3回にわたり展開している。

対象生徒には、海外での生活経験が豊かな反面、日本社会の文化や習慣・システムなどを理解していない生徒も多く存在する。その点に留意しながら、授業を展開する必要がある。

また、自分の考えを積極的に発言する生徒も多いが、自分の意見に合致しないことに対しては、排他的になる傾向がある。積極的な姿勢に対しては評価し、授業に取り入れていく一方で、排他的な言動については、内容を精査した上で指導を行うことも必要となる。

3. 実践報告（指導計画書は別紙）

（1）実践における着目点

①日本型雇用慣行の現状と課題

日本には、終身雇用制度や年功序列型賃金など独特の企業風土が存在することを理解させる。同世代で一斉行進する日本型雇用慣行によってもたらされた安定をもとに「教育→仕事→引退」の3ステージ制を確立してきた。しかし、高齢化が進み、年金の支給開始年齢を引き上げるなど制度の修正を図っているが、「現在、年金生活をする高齢者世帯の7割に老後破綻のリスクがある」というように現実的な課題が明らかとなっている。

また、AIやロボットが労働市場で存在感を増し、会社という共同体の中で雇用が守られる時代が終わりを迎えようとしている。しかし、依然として会社依存の精神は根深く、ライフ・シフトは容易ではないことを考察させる。

②海外の労働環境との比較

「海外では、どのような働き方をしているのか?」、特徴ある国を例に挙げ、その実態を考察していく。分析には、OECD（経済協力開発機構）のデータを参照しながら、ライフ・スタイルの観点だけを注視するのではなく、労働時間や労働生産性など世界の労働環境についても具体的に考察させる。

また、海外での生活経験を有している生徒が多い本校のメリットを活用し、在留国での労働事情などを語ってもらい、書籍やデータでは測れないリアルな現状を知ることに努める。

③人生100年時代をどのように生きるか

「LIFE SHIFT」では、長い人生を主体的に生きていくために複数のキャリアを重ね、マルチステージの人生へシフトしていくことが、個人的な視点から描かれている。本書では、「人生全体における再設計の必要性」「お金に換算できない価値の重要性」がポイントとなっている。

しかし、社会的な視点から見ると、マルチステージの人生を補完するためには、セーフティーネットは必要不可欠である。超高齢化により公的年金の給付が抑制されるが、老後の生活資金や公的医療保険制度などは必須である。多様な働き方が混在するライフ・スタイルに対して、「社会がどのように対応していくべきなのか?」、日本版ライフ・シフトの可能性を検証する。

(2) 実践における仮説

3(1)の①・②・③の3点に着目し、「人生100年時代をどのように迎えるのか」、雇用制度の課題や海外の労働環境を比較・分析しながら、日本版ライフ・シフトの可能性を検証する。その上で、「将来、どのようなキャリア・デザインを描いていくのか」を考察していく。

本校の生徒は積極的に発言する傾向にある。また、海外での生活経験を有している生徒が多く在籍することから、海外のライフ・スタイルや労働環境を日本に導入すべきであるという意見が大多数を占めると仮定される。

そのような仮定を踏まえ、日本社会の文化や習慣に海外の制度・システムがどのように馴染むのか、日本型雇用慣行の現状と課題について理解を深めるとともに、個人の働き方が多様化する時代において、社会的・個人的にどのように対応していくべきなのかを考察させる。

積極的で自分基準を重視する傾向にある本校生徒の見解としては、「自分のスタイルで生きていく」「日本社会の制度を変更する」などが多く挙げられると推測される。しかし、正解がないものへの取り組みに対しては消極的になりがちなことから、主体的に考察できるように授業展開をし、導く必要がある。

(3) 実践の概要

1時限目は、「人生が100年になったらどのようなことが想定されるか?」という問いに対して、様々なケースを想定させる。同世代一斉行進型の現在の日本の社会システムを解説し、「教育 → 仕事 → 老後」の3ステージ制から、人生100年時代が変わることで生じる課題について考察させる。次に、トマス・ホプズの「人生は不快で残酷で短い」という言葉をアレンジし、「人生は不快で残酷で長い」となった場合、どのように行動するのかという問いに対して、ワークシートに記入させ、2人ペアで話し合わせ、見解を口頭で発表させる。そこで「LIFE SHIFT」を紹介し、課題に対しての本書における見解を提示する。しかし、健康でも仕事があるとは限らない事例として「メガバンクのリストラ関連記事」も紹介する。

2時限目は、「LIFE SHIFT」における人生のあり方、「マルチステージ」について学習する。人生100年時代を生き抜くために必要な要素を分析し、日本社会にこのシステムが適応するかという問いに対して、グループで話し合わせ、口頭で発表させる。そこで問題となるのが日本型雇用慣行である。日本型雇用慣行の実例をワークシートに列挙させ、何名かに口頭で発表してもらい、その後、海外での労働環境を例示する。例として、「Hygge (ヒュッゲ: デンマーク語で居心地のよい時間や空間の意味)」というライフ・スタイルが、近年話題となっているデンマークを挙げる。ライフ・スタイルだけでなく、OECDのデータを用い、日本との労働環境・生産性の比較を行う。生徒には、海外の労働環境や在留国での労働状況についてグループで意見を集約させ、ワークシートにまとめた結果を口頭で発表させる。また、「働き方改革」について、リクルート社が行ったアンケート結果を紹介する。

3時限目は、「日本型の働き方と海外の働き方のどちらを選択するか」という問いかけから始める。2択で選択させ、ワークシートにその理由を記入させる。日本型・海外型のどちらを選択したか举手させ、何名かの生徒に理由を口頭で発表させる。日本型・海外型に優劣をつけることなく、社会的な視点から、どちらを選択してもセーフティーネットが必要不可欠であることに気づかせる。

セーフティーネットの役割を担う社会保障について確認し、個人の働き方が多様化するマルチステージにおいて、どのように対応すべきかを、個人の視点・社会の視点に分けて各自で考察し、ワークシートにまとめる。何名かの生徒に発表してもらい、意見を全員で共有することで各自が視点を広げ、ワークシートにある100年後の人生シナリオを作成する。積極的な生徒には発表してもらおう。最後に、この取り組みを終えた感想をまとめさせる。

(4) 考察の視点

①「人生は不快で残酷で長い」ものになるかもしれない人生100年時代を迎えるに当たって「あなたならどうするか？」との問いについて

この問いは、以下の選択肢の3択になっている。

①生活水準を下げる ②より稼ぐ ③その他

	①	②	③	無回答	合計
3A	1	21	3	8	33
3C	1	17	4	9	31
3E	1	11	3	15	30

生活水準を下げるという回答は、ほとんどなく、「②より稼ぐ」の選択肢を選ぶ生徒が圧倒的に多かった。無回答の生徒は、「より稼ぐことができない場合には、生きていくためには生活水準を下げざるを得ない」という回答が多数である。また、「生活ができないという状況を想像することができない」という生徒も若干名いた。

「③その他」を選択した生徒の回答には、「税金で賄う」「自給自足の生活をする」「現在のようライフ・スタイルや価値観自体が存在しない可能性がある」「全員が100歳まで生きているとは限らない」（一部抜粋）などが挙げられた。

人生100年時代が来ることに対しては、あまり抵抗がないように感じられたが、自分たちが生活に困窮する時代が来るかもしれないということについては、想像が追いついていない現状が見受けられる。また、自分たちが他者よりも優越的な立場にあると意識している生徒が多かったことも特徴である。「若さ」という年齢的な回答とは別に、英語や他言語を話せる、海外経験があるなど、自身の長所に絶対的な自信を持っている生徒が多い、本校ならではの結果なのかもしれない。

②海外の働き方について

海外の働き方については、スウェーデンやドイツの事例を挙げる生徒が多く見られた。有休をとらなければ罰則があるなど、勤務時間や休暇についての事柄が多く見られた。その他では、能力給や成果主義・フレックス制など日本の一部企業でも導入されている制度を挙げていた。

また、システムのなものとしては、「女性の重役が多い」「転職することがスキルアップにつながる」「重要なポストに若い人を登用している」など具体的に発言する生徒も見られた。

③日本型の働き方と海外型の働き方のどちらが良いか？の問いについて

生徒の回答

	日本型	海外型	どちらでもない	無回答	合計
3A	3	31	0	0	34
3C	5	26	0	1	32
3E	0	23	2	1	26

<日本型を選択した理由> 一部抜粋

- ・海外の働き方の方が、融通が利いていて少子高齢化にも歯止めがかかるかもしれないが、日本人の性格・文化には合わないと思う。
- ・海外に目を向けるのではなく、日本人らしい日本にあった新しい働き方を模索するべきである。
- ・安定が大事。家族を守り養う義務と責任があるので、仕事を転々とするのは得策ではない。
- ・最後まで安定していたほうが自分的には良い。
- ・日本は、安定もしていて安全である。
- ・自分の能力に自信がなく、職を失う勇気がない。
- ・実力主義すぎず、年功序列や女子の現状など日本的な慣習の中で熟成された制度だから。

＜海外型を選択した理由＞ 一部抜粋

- ・同じ会社に40年も勤めることが考えられず、給料は低くてもやりがいを感じる仕事がしたいから。
- ・日本の国民性を優先するよりもグローバル化している現代においては、海外型にシフトチェンジしていくことが自然の流れだから。
- ・国内でも転職市場への動きが活発化しており、多様な経験を推奨する傾向が強まっていると感じるから。
- ・自分のスキル・能力を十分に活かし、成果に応じた報酬を得ることは当然だから。
- ・外国籍の者は、日本で働くことが難しいという現実があるから。

④働き方が多様化する場合、どのように対応すべきか？の問いについて

＜社会として＞ 一部抜粋

- ・どんな人でも対応できるマルチな保険制度を作る。(制度の一律化)
- ・社会保険や社会保障を全て民間に委託し、選択しやすくする。
→社会保障制度の廃止
- ・長期的な保険の仕組みではなく、短期的な仕組みに制度設計の仕組みを変える。
- ・不安定な社会になるが、転職・退職・副業を行いやすくする。
→企業側もリストラしやすくする。
- ・給与体系や採用システムなどの人事制度を見直す。(固定概念をなくす)
- ・中学や高校で、起業やビジネスについてのプログラムを学習させる。

＜個人として＞ 一部抜粋

- ・自分の身は自分で守る。
- ・働き方は自分で選択したのだから、自己責任で老後を含めた資産形成を行っていく。
- ・長く働くために、能力やスキルを身につける。
- ・インターンシップを長期間して、企業に選ばれるだけでなく、選ぶアビリティを身につける。
- ・自己の能力をきちんと見定める。

4. 実践を終えての考察

(1) 生徒の反応

3年生が対象のため、進路についての感想が全体の26%、将来についての感想が全体の73%と大部分を占める結果となった。実践においては、ワークシートやグループ活動も積極的に行われ、理解の深化が図られたと感じた。

3(2) 実践における仮説に挙げたように、海外志向が強く、自分基準を重視する傾向は、データや回答例からも顕著に見られる。この結果は、本校の特異な状況も影響していると考えられる。制度や体制に対する批判的姿勢は、発表やワークシートからも散見されるが、将来的な提言や意見は少ない。基礎的な知識量が少なく、時事的な動向・内容に関する興味・関心度が高いという本校生徒の特徴と一致する。

実践終了後、「100年生きるための貯金額を計算してみた」と報告した生徒もおり、また、司書教諭からも「LIFE SHIFT」を借りる生徒が増えたとの報告を受け、生徒の興味・関心に響いた実践であったと考える。

(2) 課題・考察

「LIFE SHIFT」を題材に、「人生をどのように設計していくのか？」という本実践の主題として設定した学習のねらいは、おおむね達成できたと感じる。また、「LIFE SHIFT」の理論を考察する過程で、日本の労働問題や社会保障制度の一端に触れたことが、事後指導としての「知識・理解を深める学習活動」の場面でも効果的に働いたと感じる。

しかし、個人的な視点・社会的な視点と異なる視点で事象を捉えさせると、論理矛盾をきたす生徒が多く見られた。生徒の認識の変容について、注視しながら指導していかなければならない。その上で、固定概念や一定の価値基準の枠から抜け出せない生徒に対してのサポートも必要となる。

時事的問題や社会的に評価の難しい内容を扱う場合、授業実践の中で最終的な基準や指標をどのように提示・設定していくのか、様々なテーマを扱っていく上での課題となる。

<参考文献>

- ・リンダ・グラットン／アンドリュー・スコット著『LIFE SHIFT』 東洋経済新報社 2016年11月
- ・週刊東洋経済 2017年7月22日号 「【第1特集】LIFE SHIFT（ライフ・シフト）実践編」
- ・東京新聞 平成29年（2017年）10月30日 朝刊
- ・東京新聞 平成29年（2017年）11月22日 朝刊
- ・東京新聞 平成30年（2018年）2月17日 朝刊
- ・内閣府「平成29年版高齢社会白書」（全体版）（PDF版）
URL https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html
- ・公益財団法人日本生産性本部「労働生産性の国際比較」2016年版
URL https://www.jpc-net.jp/intl_comparison/intl_comparison_2016R2.pdf
- ・国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」2018年版
URL <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2018.asp?chap=0>
- ・金融広報中央委員会「家計の金融資産に関する世論調査」平成17年調査結果
URL <https://www.shiruporuto.jp/public/document/container/yoron/04-06/2005/>
- ・金融広報中央委員会「行動経済学の金融教育への応用の重要性」平成24年3月
URL <https://www.shiruporuto.jp/public/data/research/report4/pdf/ron120319.pdf>
- ・金融広報中央委員会「なんとかなると思いませんか 長い老後の生活資金—人生100年のライフプランを考えよう—」
URL https://www.shiruporuto.jp/public/senior/prepare/rougo_sikin/rougo_sikin001.html
- ・金融広報中央委員会「お金という観点から考える60歳以降の人生設計」
URL https://www.shiruporuto.jp/public/senior/prepare/over60_lifepan/over60_lifepan001.html
- ・独立行政法人労働政策研究・研修機構「データブック国際労働比較2017」
URL <https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/databook/2017/documents/Databook2017.pdf>
- ・厚生労働省「平成29年簡易生命表の概況」
URL <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html>
- ・野村総合研究所「NRI未来年表2019～2100」
URL <https://www.nri.com/jp/knowledge/publication/cc/nenpyo/1st/2019/2019>
- ・『『働き方改革』はどう取り組まれているのか—企業調査から見えてきた現状と試み』 リクルートマネジメントソリューションズ「『働き方改革』の推進に関する実態調査2017」（サマリー版報告書）
URL https://www.recruit-ms.co.jp/research/inquiry/pdf/rms_research_work_style_reform_01.pdf
- ・金融広報中央委員会『金融教育プログラム—社会の中で生きる力を育む授業とは—』（2016年2月 全面改訂版）
URL <https://www.shiruporuto.jp/education/about/container/program/>

別紙 指導計画書

公民科学習指導案

日時 平成30年6月〇日(〇) 第〇校時
 対象 国際関係 〇組(男子〇名 女子〇名)
 授業者 東京都立国際高等学校 教諭 小松 純
 場所 3年〇組教室

1 単元名 労働問題と社会保障

2 単元の指導目標

- (1) 労働環境の変化と労働問題について理解を深め、労働をめぐる新しい問題について学習する。
- (2) 日本の社会保障制度の現状と課題を考察し、産業構造の変化や社会的事象について理解の深化を図る。
- (3) 超高齢化社会における社会構造や労働環境の変容について理解を深め、社会のあり方を考察する。

3 単元の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
①日本の産業構造・社会的事象を総合的に理解し、考察しようとする態度を身につけている。 ②労働者の権利と日本的経営等、社会の一員として、社会生活の実現と推進を図るために意欲的に追及している。 ③日本の社会保障制度の目的・仕組み・特徴について関心を高め、その役割や課題について具体的に考察している。	①社会構造の変化や多様な立場・考え方を理解し、公正に判断しているか。 ②労働者の権利について考察し、多様化する労働環境を踏まえて諸課題を見出している。 ③日本の社会保障制度の諸課題についての考察や判断の過程や結果を適切に表現できているか。	①資料やデータ等を効果的に活用し、日本社会の諸問題を探求する学び方を身につけているか。 ②労働者の権利や制度的課題について、ワークシートやグループでの見解をまとめ、発表することができる。 ③日本の社会保障制度の課題・少子高齢化の現状について考察する際に、資料等を適切に活用しているか。	①社会問題に関わる事項や課題について体系的・総合的に理解し、基本的な知識を身につけているか。 ②社会構造の変容によって生じる多様化する労働問題・社会保障のあり方について理解し、基本的な事項・知識を身につけている。

4 指導観

(1) 単元観

現代の経済社会の変容について触れながら、労働問題・社会保障について理解の深化を図るとともに、個人や企業の経済活動における役割と責任について考察させる。

労働問題については、近年の雇用・労働問題の動向を経済社会の観点から、終身雇用制・年功序列制度などの制度面、生活と仕事の調和であるワークライフ・バランスと関連させながら、雇用のあり方や労働問題について理解の深化を図る。

社会保障については、制度の意義や役割を理解させるとともに、現状の課題と少子高齢化の進行、財政との関連など持続可能な社会保障について考察させる。

(2) 生徒観

男子生徒2割、女子生徒8割という男女構成比になっているが、国際経験豊かな生徒が多く、授業に対する取り組み、発言も積極的に行うことができる。しかし、海外帰国生並びに在京外国人生も多く、小学校・中学校での既習事項は様々である。日本語の読み書きを不得手とする生徒も多く、難しい表現や言葉のニュアンスを理解しきれない生徒も見受けられる。

(3) 教材観

身近な事例について資料を活用し、少子高齢化と日本の産業構造の変化の関連性を考察する。

小学校・中学校での既習事項を再度確認し、難しい表現を使わず、言葉のニュアンスについては、複数の言い回しを用い、理解のサポートに努める必要がある。

5 年間指導計画における位置付け

この単元における「経済活動」の意義や「労働問題」や「社会保障」の基本的な考え方について、具体的な事例を用い、経済的分野の基礎的な理論を身につけさせる。

経済分野においては「経済活動」を扱っているものの、実際には、それぞれの事項についての基本的な「理論」や「概念」というものは目に見えないものであり、その「理論」や「概念」を身近に感じることは少ない。この単元では、日本社会の構造変化に着目し、超高齢化社会における「労働問題」と「社会保障」のあり方について、経済活動を通じて多面的・多角的な知識を養成する。

少子高齢化や産業構造の変化により就業形態が多様化し、労働市場が大きく変化している。社会保障制度も充実し、生活の最低限度の保障から広く国民に安定した生活を保障するものへと変化している。超高齢化が進行する日本では、労働力需要や経済成長など国民経済にも影響は現れ、社会保障費の増大が大きな問題となっている。日本の労使関係の特色・労働者の権利と義務などの基本的事項を理解し、日本の労働市場の特徴とされてきた終身雇用制度や年功序列型賃金等の「雇用の安定を確保する」考え方と就業形態の多様化や成果主義に基づく「労働力を効率的に活用する」という考え方を比較しながら、今日の日本の雇用と労働政策のあり方について探究させる。

6 単元の指導計画と評価計画

単元の指導計画・・・8時間（各時間の学習内容）

小単元	学習内容	評価方法
100年人生時代を どのように生きるか (3時間) (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本型雇用慣行の現状と課題を確認し、日本社会の問題点を学習する。 ・日本と海外の労働環境を比較し、まとめた結果を発表する。 ・「LIFE SHIFT」の理論を考察したうえで、主体的なライフ・デザインをまとめる。 	ア②③ イ①②③ ウ①②③ エ①②
労働問題の歴史と 日本の労働問題 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・労働問題の背景とその歴史について正しく理解する。 ・イギリス・アメリカの労働運動の成り立ちを学習する。 ・日本における戦前と戦後の労働問題について、国内外の歴史的要因を確認し、理解の深化を図る。 	ア② イ①② ウ② エ①②
労働三法と 労働関係の動向 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・労働三法と労働三権について正しく理解する。 ・日本経済の動向から労働問題・社会保障制度の課題を確認する。 ・日本的経営の特徴と問題点を正しく理解し、近年の時事的な労働問題を学習する。 	ア①② イ② エ①②
社会保障の歩みと 日本の社会保障制度 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・社会保障制度とはどのようなものかを理論的に理解する。 ・イギリス・ドイツ・アメリカの社会保障制度を確認する。 ・日本の社会保障制度の歩みを確認し、現行制度の理解の深化を図る。 ・日本の社会保障制度の仕組みを理解し、制度的な問題点を確認する。 	ア①③ イ①③ ウ①③ エ②
少子高齢化問題 (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化の定義について確認する。 ・少子高齢化が抱える問題点について正しく理解する。 ・労働問題・社会保障制度問題との関連性を考察しながら、今後の課題について理解を深める。 	ア① イ① エ②

7 指導に当たって

- ①ノートが一冊の参考書になるような板書を心がけ、明瞭にポイントを押さえるように整理する。
- ②事例・事件を取り入れた資料を使用し、事象を身近な視点で考察する。
- ③積極的にグループワークに取り組めるように、ポイントを明確にする。

8 本時（1～3時間目）

(1) 本時のねらい

- ①主体的なキャリア・デザインを提言する。
- ②日本社会における労働環境の現状と今後の社会構造的な問題を考察する。
- ③海外と日本の労働環境を比較し、社会保障制度のあり方に対する理解の深化を図る。

(2) 授業評価の観点

- ①学習意欲の向上・学習体制の確立がはかられていたか。
- ②現代社会の問題点を、経済理論・経済事象と関連させ学習し、単元目標の達成及び知識の定着がはかられていたか。
- ③発問・ワークシート・資料を活用し、わかる授業の展開が行われていたか。

(3) 1時間目の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準
導入 10分	<p>ワークシートを配布する。 →ワークシートに記入する。</p> <p>Q.「人生が100年になったらどのようなことが想定されるか？」 →「平均寿命の推移と将来推計」から人生100年時代の到来をデータで確認する。 寿命が延びる＝できることを例示する。 例 食事の回数、宇宙旅行など</p>	<p>→各自で発表を促す。 発表した意見は、黒板に列挙する。</p> <p>内閣府「平成29年版高齢社会白書」のグラフを使って説明する。</p> <p>・わかりやすい事例を挙げる</p>	<p>イ① ウ①</p>
展開 30分	<p>日本の社会システムについて学習する。 →ワークシートに記入する。</p> <p>現行のシステム →同世代で一斉進型(3ステージ制)を理解する。</p> <p>平成30年2月17日東京新聞の記事を読む。 年金制度の変更点を確認する。 →現行制度の再確認。 →ワークシートに記入する。</p> <p>現行制度の問題を考察し、発表する。 →ワークシートに記入する。</p> <p>トマス・ホップズの言葉を用い、人生100年時代をどのように生きるかを、ワークシートに回答する。 →2人グループとなり、互いの回答とその理由を説明し合う。 →回答した番号を挙手する。 →口頭で発表する。</p> <p>「LIFE SHIFT」における見解を、ワークシートに記入する。</p>	<p>単なる空欄補充にならないように、具体的な解説をしながら、授業を展開する。</p> <p>「LIFE SHIFT」にあるジャック、ジミーを例に日本の社会に置き換えて説明する。</p> <p>新聞記事を活用する。 →平成30年2月17日東京新聞「主要国の60歳以上の人口比率」を提示。</p> <p>上記の新聞記事から問題点を考察させる。</p> <p>正解を提示するのではなく、生徒の主体的な回答を促すように留意する。 →机間指導を行う。</p> <p>回答した人数はメモを取る。 →特定の生徒の意見を取り上げることをないように注意する。</p> <p>「LIFE SHIFT」を紹介する。 →「LIFE SHIFT」の見解が、回答ではないことを理解させる。</p>	<p>エ② エ① ウ② ア② ア③</p>
まとめ 5分	<p>メガバンクのリストラの記事を読む。 ・平成29年10月30日 東京新聞 ・平成29年11月22日 東京新聞</p>	<p>→健康でも仕事があるとは限らない例を挙げる。 例 AIの発展 科学技術の進歩</p>	<p>ア②</p>

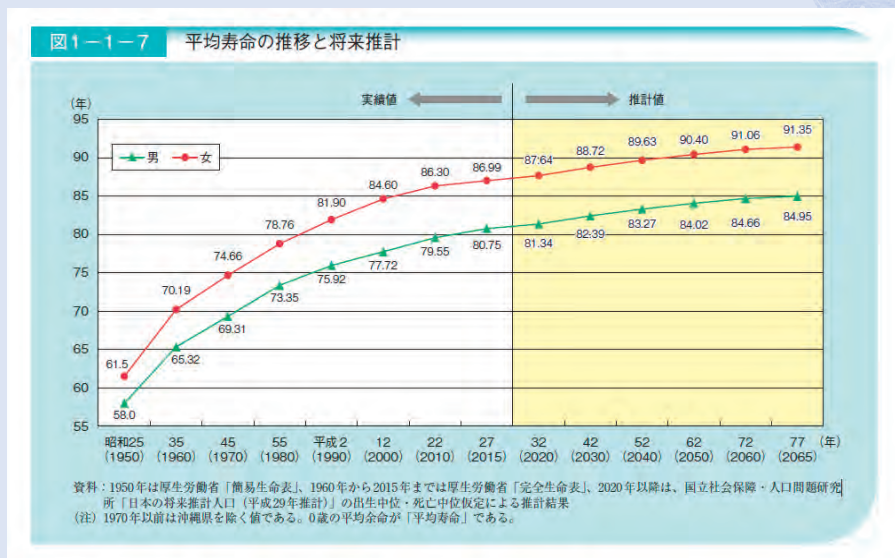
(4) 2時間目の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準
導入 5分	前時の確認 「LIFE SHIFT」について確認する。 日本の社会構造の変容と制度的な問題について振り返る。	→一連の流れを簡単に振り返る。	
展開 35分	「LIFE SHIFT」の概念を学習する。 マルチステージ制 →年齢とステージが関係なくなり、キャリアが多様化する。	現行の日本社会と比較しながら行う。 マルチステージ制を善、3ステージ制を悪としないように留意する。 「LIFE SHIFT」にあるジェーンを例に説明する。	イ②
	人生100年時代を生き抜くためには、何が必要か考察する。 →思いついたものを、各自発表する。	考察した結果は、発表させる。 発表したものは、黒板に列挙する。	イ③
	上記で挙げた必要な要素を、現在の日本社会の中で、手に入れる・身につけることができるのか？ →グループで考察する。	特定の生徒の意見に偏らないように注視する。	ア②
	日本型雇用慣行について確認する。 →グループで話し合い、日本型雇用慣行にはどのようなものがあるかをワークシートに記入する。	終身雇用制度・年功序列型賃金など特定の回答に集中することが想定されるため、具体的な事例を挙げながら、その他の事例に誘導していく。	ウ②
	海外の働き方について学習する。 デンマークのライフ・スタイル「Hygge」を例に海外の働き方を確認する。 →OECDのデータをもとに、日本との比較を行う。	日本の労働環境が悪いという固定概念を持たせないように指導を心掛ける。	イ②
その他の国のライフ・スタイル、労働環境をグループで話し合わせる。 →グループでの話を、クラスで共有するための発表をする。	ワークシートにまとめさせることを注意する。	ウ③	
まとめ 5分	既習事項を振り返り、日本の働き方と海外の働き方のどちらが良いかを考察する。	「働き方改革」におけるリクルート社が行ったアンケート結果を紹介する。	

(5) 3時間目の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準
導入 5分	前時の確認 「日本の社会構造の変容と制度的な問題について振り返る。」	→一連の流れを簡単に振り返る。	
展開 35分	日本の働き方と海外の働き方のどちらが良いか？を考察する。 →ワークシートに記入。 →どちらを選択したか、挙手する。 →選択した意見を発表する。	机間指導を行う。 回答した人数はメモを取る。 →どちらが良いかの優劣はつけないように指導上留意する。	ウ②
	多様な働き方（個人的な視点）とそれらを補完する社会保障（社会的な視点）について理解する。	「LIFE SHIFT」の考え方は個人的な視点によるものであることを確認させる。 →その上で、社会的な視点からどのように補完していくのかを考察させる。	ア③
	日本の社会保障の制度を確認する。 →ワークシートに記入。	セーフティーネットである社会保障が必要不可欠であることを気づかせる。	ウ③
	個人の働き方が多様化する場合（マルチ・ステージ）にはどのように対応すべきなのか？社会的な視点と個人的な視点の両方から考察する。 →ワークシートにまとめる。 →まとめた見解を発表する。	机間指導を行う。 視点をきちんと分けられているか注視する。 視点がうまく分けられていない場合は指摘し、再考を促す。 →前者の意見を強く否定するようなものに対しては留意する。	エ②
	「人生100年」のシナリオを描いてみる。 →ワークシートに記入。	発表ならびに公開するものではないと説明し、学習を通じて、現在の自分が思うままに書いてもらうように指導する。 →積極的に発表したい者については、その機会を与える。	エ① エ②
まとめ 5分	取り組みを終えての感想を記入する。 →記入したワークシートを提出する。	次回の学習の予告 これまで学習した労働問題は、日本だけの問題なのか？その背景と歴史について考察する。	

資料1



内閣府 「平成29年度高齢者白書」

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w=2017/zenbun/pdf/1s1s_03.pdf

出典) 内閣府「平成29年版高齢社会白書」(全体版)(PDF版)

https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html



出典) 東京新聞 2018年2月17日付(時事通信)



(新聞記事は、新聞社および通信社の許諾を得て転載しています)

主要国の65歳以上の人口比率（1850～2100年）

年次	日本	アメリカ	フランス	ドイツ	イギリス	デンマーク
1880	5.72	…	8.11	4.72	4.62	6.08
1900	5.49	4.07	8.20	4.88	4.69	6.66
1920	5.26	4.67	9.05	5.77	6.03	6.85
1940	4.80	6.85	11.42	8.86	8.97	8.38
1960	5.73	9.13	11.59	11.47	11.76	10.60
1980	9.10	11.56	13.92	15.65	14.97	14.43
2000	17.36	12.32	16.01	16.47	15.89	14.85
2010	23.02	12.97	16.82	20.54	16.60	16.67
2020	28.88	16.62	20.72	22.15	18.97	20.21
2030	31.19	20.37	23.90	26.79	21.96	22.74
2040	35.35	21.61	26.23	30.04	24.28	24.67
2050	37.68	22.11	26.73	30.69	25.45	24.43
2060	38.13	23.64	26.86	31.68	26.68	25.47
2070	38.31	25.04	27.51	31.75	26.93	26.70
2080	38.22	26.00	28.69	31.54	28.10	27.54
2090	38.31	26.85	29.64	32.09	29.39	28.21

出典 国立社会保障・人口問題研究所

出典) 国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」2018年版
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2018.asp?chap=0>

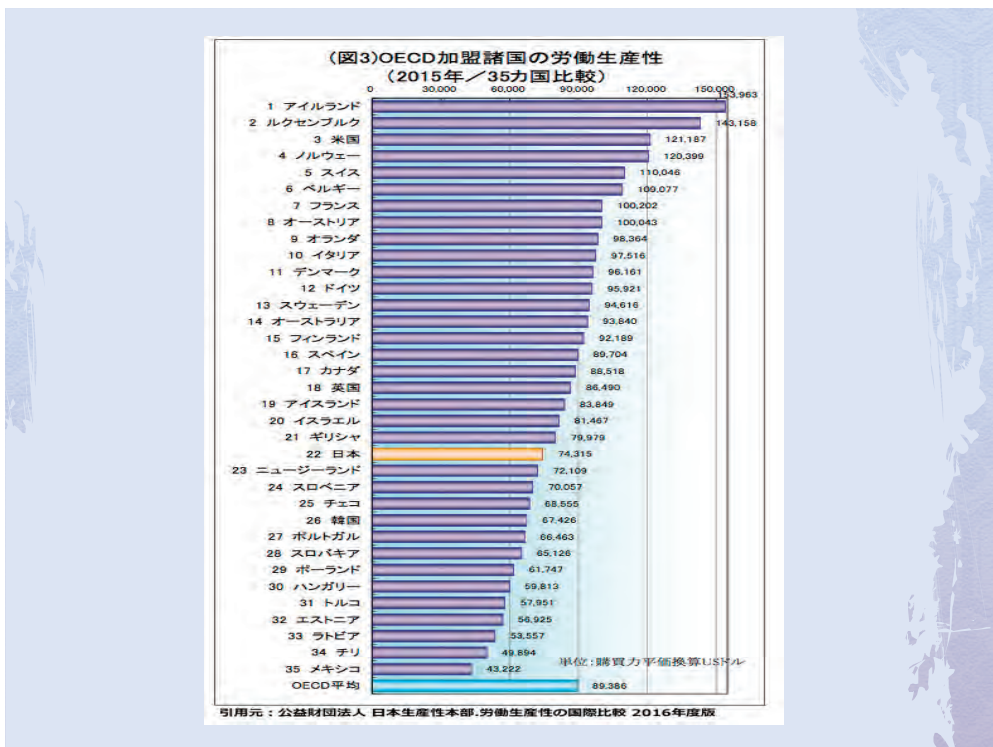


出典) 東京新聞 2017年10月30日付 (共同通信)

(新聞記事は、新聞社および通信社の許諾を得て転載しています)



出典) 東京新聞 2017年11月22日付 (共同通信)



出典) 公益財団法人日本生産性本部「労働生産性の国際比較」2016年版
https://www.jpc-net.jp/intl_comparison/intl_comparison_2016R2.pdf

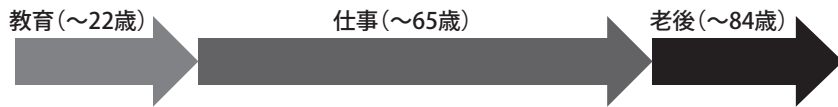
(新聞記事は、新聞社および通信社の許諾を得て転載しています)

資料2 ワークシート

「LIFE SHIFT」から考える 人生100年時代

人生が100年になったら、どんなことが想定されるだろうか？

現在の日本の社会システム →



年金制度 ()

日本の支給開始年齢は()歳

→本人の意思で60歳に前倒しができる一方で、70歳まで遅らせることができる。

※マクロ経済スライド

現役人口や平均余命の伸びに合わせて、年金財政の収支が均衡化するようにする仕組み。

現役人口の減少や平均余命の伸び、さらには経済の低成長が重なり年金額は減少する。

しかし、()が進み、年金だけでは十分な生活資金が賄えない。65歳で引退するならば、現在の収入の()%を貯蓄に回さなければ老後の備えとしては不足。

↓

そんなに貯蓄したら生活費がなくなり、生活できなくなる。

↓

現在では医学の進歩によって健康で長生きできるようになった。

今後は、人生100年時代がやってくる。

トマス・ホブズ (1588~1679) イギリスの哲学者
 「人生は不快で残酷で短い」→ 今後は「人生は不快で残酷で長い」になる可能性

Q あなたなら、どうする？

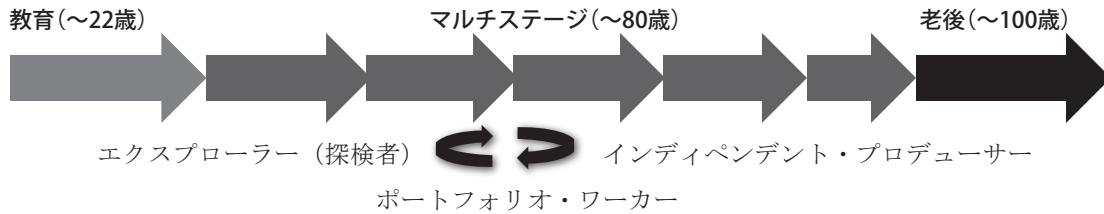
- ① 生活水準を下げる ② より多く稼ぐ ③ その他

「LIFE SHIFT」では、()、課題は解決できるとしている。

→しかし、()

三年 組 番 氏名

「LIFE SHIFT」では →



人生100年時代を生き抜くためには、何が必要か？

- () …現金や不動産などの形のある資産
- () …市場では売買できないが、長期的には利益をもたらすもの
- ↓
- 形のない資産・お金では売買できない
- () … 仕事につながるスキルや人脈など金銭的な所得を生み出す能力
- () … 家族や友人との良好な関係、健康や幸福感、活力等の源となるもの
- () … 柔軟性や勇気・自己分析力など変化に対応するための能力

その他にも、アイデンティティ、リ・クリエーション(再創造)など

これらを獲得するための足かせになるのが ()

→

海外の働き方はどのようなものか？

日本型の働き方と海外型の働き方どちらが良い？ (○で囲み、その理由を書きなさい)

日本型	海外型
理由	

→ 社会の視点から見るとマルチステージを支える () が必要不可欠である。その役割として期待されるものが、() となる。

日本の社会保障制度には

()・()・()・公衆衛生の4つの柱がある。
 この「LIFE SHIFT」においては、とりわけ、()の要素が重要となる。
 社会保険には、()と()があり、工業化が発達した()
 世紀に職域保険が普及した。
 →これは企業単位で保険料の徴収を行い、安定した()が前提だった。

個人の働き方が多様化する場合（マルチステージ）には、どのように対応すべきか？

社会として	
個人として	

人生の転機を迎えそうな数年後の自分、100歳の自分、その間の年齢の自分をイメージして100年後の人生シナリオを具体的に書いてみよう！

	()歳の自分	()歳の自分	100歳の自分
仕事			
家族			
その他			

この取り組みを終えての感想
